

多文化共生の社会をめざした国際理解教育

－学びのある交流学習の授業開発－

国際理解教育研究会議

研修員 佐藤 公孝（川崎市立東柿生小学校） 三井 秀夫（川崎市立東生田小学校）

矢崎 真弓（川崎市立菅中学校） 野村 志保（川崎市立宮前平中学校）

指導主事 佐藤 裕之

I 主題設定の理由

最近の国際理解教育の実践例を見てみると、英語活動を中心とした実践が多かったり、外国文化理解のためにインターネットや本で調べたことをまとめて発表したり、また3F（FOOD、FASHION、FESTIVAL）を取り入れたりしたイベント型の単発的な授業が多く感じられる。どの授業も外国の文化に触れるよい機会となっていることは確かであるが、それらの学習には、学びの継続性や深まりをいう点からは限界も感じられる。

そうした課題を基に、今国際理解教育で考えられていることの一つに「人との関わりから学ぶ」というものがある。海外で仕事や研究に携わった方から話を聞いたり、留学生と交流を進めたりすることにより、国際理解の学習をより深いものとして、子どもたちの心情を揺り動かすような授業を展開していこうと考えである。

今年度より本研究会議では、東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室の協力を得て留学生との継続的な交流ができるようになった。多くの留学生や日本人学生と共に、どのような授業をつくり上げることができるのか、またイベント型で体験重視の授業から抜け出す方法はあるのか、などの課題を追究していきたい。そこで研究主題を「学びのある交流学習の授業開発」と設定した。

II 研究の内容

1 研究の内容

（1）留学生と連携して、学びのある交流学習をめざした単元及び授業を開発する。

東京外国語大学留学生をゲストティチャーとして招いての交流学習を通して、大学や留学生と連携した継続性のある、そして学びのある交流学習の在り方について研究し、単元を開発及び授業実践を行う。

（2）交流学習を通じた国際理解の授業の有効性について、授業検証し考察する。

東京外国語大学留学生との交流を通じた国際理解の授業実践の過程で、児童生徒がどのような活動に取り組み、学習を進め、自分の考えを広め深めていくことができたのかなど、効果的な指導や取組について検証し考察する。

2 研究の方法

（1）東京外国語大学と連携して、学びのある交流学習活動の構成を検討する。

子どもたちにとって、身近で具体性のある「生きた体験」にするために、東京外国語大学留学生と連携して、題材を検討し、授業づくりを研究する。子どもたちと年齢も近く、多様な文化や生き方・考え方を持つ留学生の話の聞いたり、交流を行ったりすることによって、学びのある交流学習活動を検討・開発する。

（2）事前検討、検証授業・評価・授業考察、そして効果的な交流学習在り方を研究する。

東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室との連携を密にし、事前の計画から事後の考察まで、会議を共有し、教員・支援室・学生の三者で効果的な交流学習の授業について協議する。

3 検証授業

(1) A小学校 第5学年 総合的な学習の時間

「一緒に考えよう わたしたちの夢」

①単元について

交流や体験に重点が置かれすぎてねらいや学びが曖昧であったり、すぐインターネットでその国の生活や遊びについて調べたりしていた今までの実践を振り返り、今日、多文化共生教育で重視されている「自己と他者との関係を築く対話的過程を通して自己・他者・環境（新しい価値観）との共生を育む実践」（「改訂新版 国際化と教育」 佐藤郡衛）を行っていきたいと考えた。外国人留学生や外語大生から話を聞き、質問をしてわからないことは自分なりの視点をもって調べ、そのことを再び伝える学習、つまり人としっかり向き合って話し考える学習を大切にしていきたい。この学習を通して、自分と人や社会をつなげようとする意欲やそこから生まれる新しい価値を学ばせていきたい。

外国人留学生と外語大生が年間3回来校していただけるので、その回ごとにそれぞれ学びの内容を考えた。1回目は「出会い」を楽しみ、自分なりに文化の違いや似ている点に気がつくこと。2回目は、自分の課題をもち、自分で調べたり、困った時は外国人留学生や外語大生に進んで質問したりして問題解決をしながら、カルタづくりを通して「文化の多面性」に気がつくことである。そして3回目、つまり単元全体のゴールとして、日本で学ぶ外国人留学生や世界の外国語を学ぶ外語大生の小学校5・6年生時代、今、そして将来こんな人になりたいという思いを知り、「人の生き方や姿勢」を感じ、もうすぐ6年生になる自分を見つめる学習を考えた。

②単元目標

- (1) 外国人留学生との出会いを楽しみ、言葉や生活などに興味をもち、自分なりに文化の違いや似ている点に気がつくことができる。
- (2) 自分の課題に対して進んで調べ、外国人留学生や外語大生と話し合う中で、宗教と食事、民族と言語など文化の多面性とその背景に気がつくことができる。
- (3) 国籍や年齢に関係なく自分の夢をもって具体的に努力する大切さを知り、行動しようとする。

③国際理解教育の視点 (3回の交流学习での学びと評価の視点)

(1) 多文化理解 <B-2>

- ・外国人留学生との出会いを楽しみ、言葉や生活などに興味をもつことができる。
- ・自分なりに文化の違いや似ている点に気づくことができる。

(2) 自己表現力・思考力 <C-1 C-2>

- ・インドネシアについて、自分の課題をもち、カルタづくりに必要な情報を集め、進んで調べ学習をすることができる。
- ・課題を解決するために、外国人留学生や外語大生と進んで話し合い、文化の多面性やその背景に気づくことができる。

(3) 自尊感情の育成 <A-1>

- ・日本で学ぶ外国人留学生や世界の外国語を学ぶ外語大生の小学校5・6年生時代、今、そして将来こんな人になりたいという思いを知り、国籍や年齢に関係なくその人の生き方や姿勢に共感をもちながら自分を振り返る。

④指導計画と実践 13時間扱い (○印は、交流学习)

	時	学 習 活 動	◇支援と☆評価 (学び)
出 会 い を 楽 し む	①	1 ようこそ 留学生タリさん ○タリさんの国はどんな国なのだろう。 インドネシアの写真を見て、気がついた ことやタリさんに質問したいことを考 える。(6/24 実施) ①家族 ②レストラン ③小学校 ④バジャイ	◇事前にタリさんのプロフィールを知り、タリ さんに聞いてみたいことを考える。 ☆タリさんとの出会いを楽しみ、言葉や生活な どに興味をもつことができる。 ☆自分なりに文化の違いや似ている点に気が つくことができる。(B-2)
調 べ て 遊 ぶ	2 3 4 5 ⑥ 7 8 9 10	2 インドネシアカルタを作って遊ぼう ○マップを作って自分の課題を考える。 ○課題に関する資料を集めたり、タリさん に手紙を出したりする。(家庭学習) ○「川崎かるた」を楽しみながら、説明文 の構成を学ぶ。 ○自分で集めた資料やタリさんからの手 紙を基に、質問する内容を考える。 ○タリさんに直接質問する。(11/16 実施) ○資料を整理してカルタの説明文を書く。 ○カルタの読み札を考える。 ○カルタの絵札を描き、完成する。 ○インドネシアカルタで遊ぶ。	☆写真からの課題マップとインドネシアの生 活のビデオ(NHK アジア発見 南の国の デパートガール)を見て、自分の課題を考え ることができる。 ☆川崎かるたの読み札、絵札、説明文の構成を 理解して、作成の順番を考えることができ る。インドネシアカルタづくりに意欲をもち ことができる。 ◇今までの調べ学習や手紙からより具体的な 質問ができるようにする。 ☆自分の課題に対して進んで調べ、タリさんや 大学生と話し合う中で、宗教と食事、民族と 言語など文化の多面性とその背景に気がつ くことができる。(C-1)
語 り 合 う	11 12 ⑬	3 「一緒に考えよう わたしたちの夢」 ～タリさん、外語大生の小学校時代・今 そしてこんな人になりたい～ ○タリさん、外語大生の簡単なプロフィー ルを知り、誰にどんな質問をしたいか考 える。 ○8人グループで役割を決めてインタビ ューを計画する。 ○タリさん、外語大生にインタビューをす る。(2/3 実施)	◇プロフィールを基にその人に興味をもち、質 問内容がより具体的になるようにする。 ◇8人グループなので、「小学校時代」「今」 「将来」の3つの項目ごとに質問する内容を 整理させる。 ☆タリさんや外語大生の小学校5、6年生時 代・今・こんな人になりたいという思いを知 り、国籍や年齢に関係なくその人の生き方や 姿勢に共感をもつことができる。(A-1)

⑤実践を終えて

○「学び」はあったか、児童にどのような力がついたか

自分の課題を追究してインドネシアカルタを作る学習では、自分の力で一枚のカルタを作らなければならぬので自主的に調べたり、外語大生へ質問したりして意欲はたいへん高かった。個人の課題設定能力やその課題を掘り下げる力の差はあったが、自分の課題から気候と住居、手で食べることから宗教など文化の多様性に気がつくことができた。また、本やインターネットで調べた内容とタリさんから直接聞いた内容が違うこともあり、情報をどのように選んだらよいかという学びもあった。また、3回目は同じ小学校5、6年生の頃を語り合うことで、子どもたちはその人の生き方に共感して、同時に自己肯定感や将来の憧れを感じることができた。小学校時代という視点があったので、子どもたちは自分とタリさんたちを比べ、自分の問題として考えることができた。

○継続性のある交流学习は効果的であったか

年間3回、外国人留学生と3人の学生が来てくれたことで、子どもたちとの関わりができ、コミュニケーションを図ろうとする意欲が育った。しかし、互いの日程の関係で、6月、11月、2月と学期に1回という授業を設定したが、学習の継続という点では回ごとにそれぞれの学習課題を設定して授業を考えざるを得なかった。

○今後の課題とあるべき授業の姿を考える

一人一人の興味や課題に対して、「何を知らせるか」「何を感じさせるか」「何を考えさせるか」をより整理する必要がある。さらに、学習課題や素材を通して「こうあってほしい子どもの姿」をより具体的な姿として描き、そのためにはどのような支援が必要なのかを考える必要がある。文化・国理解から人理解の学びができたことと評価しているが、今後は、協働する学習を通して、どんな学びができたかを検証していきたいと考える。

(2) B中学校 第1学年 総合的な学習の時間

「人との出会いを通して考えよう 様々な生き方・考え方」

①単元について

本単元を行う前に、生徒たちの外国や日本に対する認識を知るためのアンケートを行った。このアンケート結果から、外国のことをよく知り、興味をもっている生徒もいる一方で、ほとんど質問に答えられない生徒も多く、生徒によって世界や外国についての知識や興味に差があるということがわかった。しかし、これは世界や外国についての興味という問題ばかりではなく、自分の周りで起きていることや周りの人たちに対しても、あまり関心がないということにつながると考えられる。

生徒たちには、自分の将来や自分の生き方について、まだ具体的に考える機会も少なく、また、このような話を聞く経験も少ない。

今回、日本の大学で学んでいる留学生や日本人の学生との交流学习を行う機会を得ることができ、生徒とも年が近く、かつ多様な文化や生き方・考え方をもつ講師が、自分自身や自分の生き方について語る話は、生徒にとって遠い世界の話ではなく、身近なもの、そして、具体性をもった「生きた体験」として、生徒の心に迫ってくるのではないかと考え、この単元を設定した。

②単元目標・国際理解教育の視点

- (1) 講師との出会いを楽しみ、講師の話聞き、講師を通して「人」の生き方・考え方に興味を持つことができる。(A-2 生命・人権の尊重)
- (2) 調べ学習や講師の話聞く中から、講師の生き方・考え方について、自分(日本)との共通点や異なる点などを見つけることができる。(B-2 多文化理解)
- (3) 同じ国出身の異なる講師の話聞くことで、2人の講師の生き方・考え方の共通点や異なる点などを見つけ、生き方・考え方の多様性に気づくことができる。(B-2 多文化理解)
- (4) 2人の講師の話から、講師の国について考え、その国の抱える課題や自分や日本との関わりなどを知ることができる。(B-3 相互依存関係理解)
- (5) 自分たちの調べたことや考えたことを発表したり、意見交換をすることを通して、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞き、更に自分の考えを深めたりしていくことができる。(C-2 自己表現力 C-3 コミュニケーション能力)

③指導計画(7時間) ☆④時間目と⑥時間目が交流学习

時	学 習 活 動	活 動 内 容
1 2 3	1. 事前学習 ・講師を迎える準備をしよう。	○事前学習として講師のプロフィール・国の概要を知り、迎える準備をする。 ・講師の国について調べる。 ・調べたことをA4版の用紙にまとめる。
④	2. 新しい出会いを通して、様々な生き方・考え方を知ろう。 (11/10 実施) 《講師の出身国》 ・タイ ・マレーシア ・中国 ・スーダン	交流学习① ○講師より話を聞いたり、体験したりする。 《テーマ》 「自分史」や日本に来ての経験を語る。 ・どんな中学時代を過ごしたのか。 ・なぜ日本に来て勉強しているのか。・日本の印象 ○疑問などを質問し、学習を振り返る。
5	3. テーマごとに準備をしよう。	○交流学习①の振り返りをまとめ、交流学习②に向けての準備をする。 ・交流学习①で聞いたことや考えたこと・気づいたことを整理する。
⑥	4. 講師と一緒にテーマを決めて、話し合いをしよう。 (1/30 実施)	交流学习② 〈中国+タイ〉グループ(2つのグループを合わせる) ・タイと中国の2人に文字や学校生活・自分史など共通の〈項目〉について話してもらい、生徒には日本について同じ項目を考えさせ、3つの国の「違いと共通点」(多様性と共通性)を考える。

		<p><マレーシア>グループ</p> <p>《テーマ》 多民族国家について知る。</p> <p>・「多民族社会で仲良くする方法」を「A村とB村は（～の理由で）仲が悪い。みんならどうする?」という設定をつくり、仲良くする方法について考える。</p> <hr/> <p><スーダン>グループ</p> <p>《テーマ》 ・偏見を是正する。先入観を取り除く。 ・多様な生き方・考え方を知る。</p> <p>① 事前にまとめたスーダンのイメージを一人ずつ話す。 ② 講師（外語大・日本人留学生原田さん）の話聞く。 ③ 話を聞いて、思ったことや気づいたことをカードに書く。 ④ カードを見ながら、意見交換をする。 ⑤ 学習を振り返る。</p>
7	5. まとめをしよう	<p>・報告会をする。</p> <p>① 代表者からの報告 ② プリントによるまとめ</p>

④評価（交流学習①②での生徒の感想から）

タイ・中国	<p>《多様性》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少し海を渡るだけで文化が違うのが、改めて不思議だと思いました。 ・仏教が学校の制服にも影響しているタイや親も子も勉強熱心な中国、そして私たちが住んでいる日本。それぞれ違いがあって良いと思います。 ・いつも当たり前だと思っていたことが、ほかの国では、違ったりして、世界が広がった感じがしました。 	<p>《共通性》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国はそれぞれ違うけれど、楽しいと感じる事や、国の行事、学校生活などつながっているところがある。 ・遊び方が日本と似ているのに、驚いた。 ・3つの国では、考え方がそれぞれ違うことを、実感しました。でも、「たくさん遊びたい」とか「制服はかわいいのがいい」という子どもの心は、一緒でした。
	<p>《その他》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国の違い、共通点を知るとは、新たに様々な事が学べて、とても良い事だと思った。 ・日本に留学して学んでくれて、とてもうれしく思った。だが、きっと私より留学生の方が日本を知っているのだろうなと思った。私も恥じぬ程度に日本を知っておきたいと思った。（日本のことをもっと知らなければ、という意見複数） 	
マレーシア	<p>《仲良くしていく方法として、考えたこと》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・民族が違う人たちが仲良く、生きていくためには、我慢も大切（複数） ・色々な生き方・考え方を互いにきちんと理解する。 ・宗教の違いを理解する。 ・国が貧しい民族を援助する。 ・お互い干渉しない。 ・近所的な関係を築き上げていく。 ・その国の決まりをまもること。 ・お互い譲り合うこと。 	<p>《その他》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・我慢するという事は、大切だと思った。自分にもとても必要なことだと思いました。 ・かなり難しくよくわからなかったけれど、本当の話が聞けて良かった。 ・いろいろな国があつて、本当におもしろいと思った。全く想像できないような話だったけれど、少しマレーシアを身近に感じました。
スーダン	<p>《偏見の是正・先入観の排除》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怖い・堅いイメージからみんな優しい、温かい人へ ・スーダン人も日本人も同じ人間だから、考えていることは、同じだった。 ・戦争があつたので、恐い人がたくさんいると思っていたが、おもしろくて、いたずら好きな人がいっぱいいるんだと思いました。 ・みんなおしゃれをするところに、びっくり。 ・みんな協力して、がんばっている。 ・人に対する感じ方が、はじめとだいぶ変わった。 ・スーダンのことが、色々よくわかった。原田さんも、優しくそうな顔をしている。 ・インターネットなどで調べたことより、実際に話を聞いたり、行ってみたりすると、わかることが沢山あると思いました。 ・耳よりもとにかく直接自分の目で見て確認するのが一番だということがわかった。 ・人を誘ってお茶に行くと聞いて、人間関係を大切にしている人たちだと思った。 	<p>《多様な生き方・考え方を知る》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本より不便なところが多いのに、スーダンの子のほうが日本の子より元気で楽しそう。 ・スーダンの人は、お金がなくても、けちではないのが日本人と違って良い。 ・原田さんは、スーダンのことが、大好きだ。なんだかんだ言っているスーダンにたくさんのお友達がいる。私も外国のお友達がほしいと思った。 ・スーダンについて話している原田さんは、とても楽しそう。 ・原田さんがスーダンに行った理由にびっくりした。 ・スーダンは一つの国と言っても、いろんなイメージがあり、1つにはまとまりません。 ・原田さんみたいになりたい。（かもしれない） <p>《その他》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次の時はスーダンから来日した留学生と原田さんの2人から話を聞きたい。

⑤実践を終えて

○「学び」はあったのか・生徒にどのような力がついたのか

- ・今回は特に講師に対して、親しみをもち、講師の生き方に感心したり、共感したりする生徒が多かった。このことから、「講師を通して、人の生き方・考え方に興味をもつことができる。(A-2 生命・人権の尊重)」という目標に近づいたと思う。
- ・2回の学習を通して、生徒は色々なことに気づいている。その中でもインターネットなどで調べただけではわからないことが多く、実際にその国の人に話を聞いたり、自分の目で確認したりするのが一番だという意見や日本についてもっと知らなければいけないという感想も複数の生徒から出ていて、今後の学習の姿勢や課題につながっていくと思われる。
- ・2回目の交流学习では、意見交換をすることを目標にしたが、課題が難しかったのか、講師の問いかけに対して幾つかの意見が出た程度で、生徒同士の話し合いまでには深まらなかった。

○継続性のある交流学习は効果的か

- ・生徒の感想を読むと1回目より2回目の交流のときの方が、「講師と話したい」という感想が増えている。このことから、生徒は2回の交流を通して講師をより身近な存在に感じることができ、国や文化の理解にとどまらず、講師を通してその国の「人」そのものに興味をもつことができたようだ。これは、1回だけの交流では達成できなかったのではないと思われる。

○課題が身近な生活から乖離していないか

- ・タイと中国の2つの国を比較した中で、日本との比較も行った。また、学校生活や講師自身の生活を取り上げたので、自分自身の生活との比較がしやすく、身近な課題だったと思われる。
- ・スーダンとは地理的にも、心理的にも遠い国だったが、2人の講師の人柄もあり、スーダンに親しみを感じる生徒が多かった。生徒にとって、遠いことが当たり前のような国に、日本や自分と共通することを発見したようだ。
- ・マレーシアについては、課題が難しかったようだ。また、多民族社会の問題を具体的な例を通して知り、その対処法を考えたが、日本における民族の問題について、生徒たちの考えを深めるまでには至らなかった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

- ・教員、大学との連携が図られ、様々な角度から授業づくりの検討をすることができた。結果として事前・事後の準備や話し合いが十分にでき、工夫した授業を構成することができた。大学と連携した交流学习の新しい授業展開を開発することができた。
- ・1年間にわたる交流学习を通して、「異なる文化理解」から「他者への理解」そして「自分の生き方を考える」と視野を広げ、「人から学び、自分を見つめる学習」へと発展することができた。
- ・継続した交流ができたので、外国人が身近に感じるようになった。そして、多くの人との関わりの中で、子どもたちは生き方や考え方、そして多様性を実感することができた。

2 今後の課題

- ・ステレオ化した異文化理解の授業を避けるためにも、「文化紹介」や「民族」そして「留学生が異文化を伝える」ことについて、指導者が確かな指導計画や指導観をもつことが重要である。また、日本人の海外留学経験学生との交流学习の有効性も今後探っていきたい。
- ・大学との連携ということで新しい試みであったが、双方の事情から、事前打ち合わせの時間の調整や留学生の人材確保など、具体的実践に当たっての準備の工夫が必要である。
- ・学びの継続性という意味では、子どもたちの学びの検証の在り方について、検討していくことが求められる。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をいただいた先生方、研究をご支援していただいた研修員所属の校長先生ならびに教職員の皆様にご心からお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|------------------------------|-------|
| 佐藤 郡衛、林 英和『国際理解教育の授業づくり』教育出版 | 1998年 |
| 武蔵野市国際交流協会『わーい！NGOが教室にやってきた』 | 2003年 |
| 佐藤 郡衛「国際化と教育」 | 2003年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------|-------|
| 東京学芸大学教授（川崎市総合教育センター専門員） | 佐藤 郡衛 |
| 東京外国語大学教授 | 青山 亨 |